

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
のざわ 野沢 やす	女 性	8 7 歳 H27.8.15 現在	1 7 歳	日 吉 (中宇利)

「爆弾の破片が今も体内に 豊川海軍工廠空襲」

私は昭和16年（1941）に宇理尋常高等小学校を卒業し、新城高等女学校へ入学しました。戦況が悪化し、昭和19年になると学校が海軍工廠の兵器製造工場となり、私たち4年生は豊川海軍工廠へ行くことになりました。私は中宇利でしたので、通うことはできず寄宿舎へ入りました。

新城高女の生徒の多くは、私が配属された会計部や総務部で働きました。19年4月から勤務し、20年3月には卒業しましたが、そのまま専攻科に進み、工員として海軍工廠に残りました。そして、運命の8月7日を迎えたのです。



昭15年 姉と一緒に(左がやすさん) 中宇利

○ 私一人が生きのびて

会計部は、正門近くの少し東へ行ったところにあり、私は2階の事務室で仕事をしていました。8月7日の朝、空襲警報が出た時は、もうすぐ近くにB29が迫っていました。みんなわれ先に階段を駆け下り、防空壕へ避難しました。避難が終わらないうちに、「ドカーン、ドカーン」と大きな音が立て続けに聞こえました。あわてて防空壕へ飛び込むと、新城高女の子たちがいました。担任の浅見巖先生も入ってきました。爆弾のものすごい音が何度もして、防空壕が激しく揺れました。すると爆風で防空壕の入口のフタが吹っ飛び、爆風が中に入ってきました。その勢いでお腹がちぎられそうになり、みんな小さく固まりました。浅見先生から教えられたように親指で耳の鼓膜を押さえ、4本の指で目と鼻をふさぎました。

どれぐらいの時間が過ぎたのか、静かになって目を開けると、壕の中は砂煙でよく見えず、とても息苦しくなりました。「こんな所にいると危ない。外へ出ろ！正門から外へ出るんだ！」と、浅見先生の声がしました。みんな急いで外へ出て、正門に向かって走りました。廠内は火の海で、爆弾の穴がいくつもあり、まっすぐには走れません。倒れている人が何人もいました。バラバラになった死体を踏んだり、飛び越えたりもしました。倒れてうめいている人もいますが、とても助ける余裕もなく、前を走る荒川和寿子さんの後を必死についていきました。

やっとの思いで廠外へ出ました。正門から少し南へ行き、豊川稻荷の方向へ向

かおうとしました。いっしょにいた新城高女の友だちは、私を含め7人でした。道路の横にイモ畑がありました。すると、上空からまたB29の編隊が迫ってくるのが見えました。近くに防空壕はありません。私たちは急いで道路とイモ畑の畝の間に、縦に並んで伏せました。私はちょうど真ん中あたりでした。深さはほんの30cmぐらいでしょうか。手で耳と目や鼻を押さえました。

「ドカーン、ドカーン」と、ものすごい音と体が飛び上がりそうな地響きがあり、「シャーッ！」という音に続いて、「グワーン」という耳をつんざくような爆発音を聞いたような気がしました。すぐ横に爆弾が落ちたのです。

その後のことは覚えていません。後で聞いた話です。私は爆弾で空いた8畳ぐらいの大きな穴に転がり落ちていたそうです。衛生兵が私を見つけ、救護所へ運んで手当てをしてくれたそうです。私は昏睡状態になり、生死をさまよいました。三日目にやっと意識が戻りました。父と母、鳥原の姉がついてくれていました。3人とも涙を流して喜んでくれました。爆弾にやられて全身血だらけで、よく助かったもんだと言われました。私は、しばらくもうろうとしていたと思いますが、すぐ後で悲しい知らせを聞かされました。私がいっしょに逃げた6人の友だちは、首が飛んで胴体だけになったり、腕や足がなくなったりして、みんな死んでしまったというのです。爆風で吹き飛ばされたり、破片でやられたりしたと思います。一番仲のよかった市川の荒川和寿子さんもその一人でした。和寿子さんは名簿順が近く、何をすることもいっしょでした。習字が得意な子でいつもきれいな字を書く、とても気立てがよい子でした。私は泣けて泣けてたまりませんでした。真ん中にいた私だけがなぜ助かったのでしょうか、奇跡としか言いようがありません。新城高女の同級生は22人も亡くなっていたのです。

意識が戻るとすぐに中宇利へ帰りました。どうやって運んでもらったのかは覚えていません。その後は、公会堂にいた桜部隊の軍医さんに消毒程度の手当をしてもらい、どうにか命を拾うことができたのです。

爆弾の破片は、今も首や頭、肩に何か所も残っています。レントゲンを撮るとよく分かります。当時の混乱した状況では、体に入った破片を取り出すことはできなかつたんですね。手や肩には破片が貫通したところもあります。手で顔を覆わなかったら、目の玉が飛び出たかもしれません。九死に一生とはこのことです。



工廠被爆絵図 提供:桜ヶ丘ミュージアム

○ 弟はこっばみじんに

実は、父母と鳥原の姉の3人は、私だけでなく弟も探していました。私の弟は安形元治といいます。豊橋二中にいて、2年生の時に学徒動員で第4機銃部に配属されました。同級生の話を聞くと、正門から逃げようとしたらしいのですが、250kg爆弾の直撃を受け、こっばみじんになったようです。父母と姉だけでなく、二中の先生や同級生も必死に探してくれましたが、何も見つかりませんでした。元治の場合は、最後まで遺品一つ見つからなかったのです。そんな子は、弟だけでなく他にも何人かいたそうです。

○ 寄宿舍生活

私は、豊川稲荷の近くにあった第3学徒寮にいました。新城高女の30人以上が入っていて、私たちは10畳ぐらいの部屋に7、8人で泊まっていました。学徒を引率して世話をしてくれたのは、浅見巖先生と鈴木とよ子先生で、二人とも宿泊していました。浅見先生は、時々寮に来て写経を教えてくださいました。勉強を教えるわけにはいかず、困った末のことだったと思いますが、般若心経が覚えられてありがたかったです。

一番つらかったのは食べものが少なかったことです。食べ盛りなのに、いつもおわんに半分か6分目ぐらいで、お腹が空いてたまりませんでした。お米はほとんど食べられず、でん粉ごはんの場合は、でんぷんの中にご飯つぶがほんの少し入っている程度でした。干したイモが入ったこともありましたが、大豆や大豆ガスのご飯もありました。大豆はまだ食べられましたが、しぼった大豆ガスのご飯はひどくて、みんなお腹をこわして大変でした。

卒業後にいただいた給料で、蒸したイモを買ったこともあります。寄宿舍の裏で朝鮮の人がさつまいもを売っていました。私たちは、先生の目を盗んで、裏門からこっそり買いにいきました。

たまに外泊で中宇利に帰ると、おにぎりを食べられるので本当に嬉しかったです。寄宿舍へ帰る時には、梅干しを入れたおにぎりを持っていきました。みんな大喜びで、部屋でいっしょに食べました。

私の青春時代は何だったのかと思います。両親にお金の負担をかけてでも、勉強したいと思って女学校へ入学したんです。それが学徒勤労令により、否応なく工場で働くことになり、生死の狭間をさまよいました。

すべてをお国のために尽くす時代だったとはいえ、あまりにも大きな犠牲と深い傷跡を残しました。それが戦争です。どうか反戦の心を引き継いでいってください。



新城高女戦没学徒供養塔
(桃牛寺)